

## ■シベリウス／交響曲第1番 短調 Op.39

交響詩「フィンランディア」の少し前に書き上げられた交響曲第1番は、38分あまりを要する4楽章構成の作品である。民族的ロマン主義を標榜した若き日のシベリウスの肖像と云っていい。19世紀末にヘルシンキ管弦楽協会はロシアの作品をよく取り上げていて、最も演奏回数が多かったのはチャイコフスキーの交響曲だった。チャイコフスキーの音楽に横溢する民族的個性と原理に惹かれたシベリウスは、その影響を受けながら、古典交響曲の形式にのっとり、緻密な楽想のネットワークに基づく交響曲を書き上げたのである。1899年、作曲家自身の指揮で初演し、大成功をおさめたが、その後、オーケストレーションに少し修正を加える改訂を行い、改訂稿は1900年にロベルト・カヤヌスの指揮で初演された。

両端楽章が序奏をもつソナタ形式、緩やかなテンポの第2楽章に続いて、第3楽章にスケルツォという伝統的な楽章構成で、「幻想曲風に」と記されたフィナーレにいたるまで、チャイコフスキー風の激情の表現が散りばめられている。第1楽章アンダンテ・マ・ノン・トロツポの冒頭でクラリネットが独奏する幻想的な旋律が全曲を通じて基本楽想の役割を果たす。第4楽章冒頭で再現されるだけでなく、第1楽章の主部アレグロ・エネルジコの主題とも関連があって、表面的には詩的にうつろうラプソディのようにみえる楽曲の展開も、じつは基本楽想による結びつきが統一感をもたらす。第2楽章アンダンテ（マ・ノン・トロツポ・レント）はホルン4本とハーブによる和音にのせて、第1ヴァイオリンとチェロが奏でる民謡風の主題を主要主題とするロンド形式。長調と短調の色彩が溶け合っているのが特徴である。第3楽章アレグロは素朴さと軽妙さをあわせもったスケルツォ楽章。トリオでは哀感を滲ませた抒情的な主題が奏でられる。第4楽章フィナーレ（クワジ・ウナ・ファンタジア）は第1楽章と同じくアンダンテの序奏で始まり、アレグロ・モルトの主部となる。歯切れの良い短調の主題と、表情豊かに歌い上げる長調の旋律が交代しながら、全体が高揚していき、荒々しいトゥツティののち、再び力強い、満ち足りた表情となって、強奏のまま、曲が終わる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。